



(富山)

企業団地拡張に先立ち、

高三m前後を測る。
ある。なお、遺跡周辺は標
団地の南側には荒畑遺跡が
田部に広がる。また、企業
界にある企業団地の西側水
北東へ一・五kmの北高木地
区、北隣する新湊市との境
ある。当遺跡は、市街地から

大島町は、県中央部にあたる射水郡の西端部に位置し、その町域は、庄川及びその支流によって形成された沖積平野の扇端部に広がる。当遺跡は、市街地から

- 1 所在地 富山県射水郡大島町
- 2 調査期間 一九九二年(平4)五月～十二月
- 3 発掘機関 大島町教育委員会
- 4 調査担当者 安念幹倫(富山県埋蔵文化財センター)
- 5 遺跡の種類 集落跡・祭祀跡
- 6 遺跡の時代 八世紀後半～九世紀初頭
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

富山・北高木遺跡

きたたかぎ

一九九二年から発掘調査を開始した。確認した遺構は、川、溝、井戸、土坑、柱穴である。

木簡は川跡から出土した。調査区のほぼ中央部を横切るように流れる川跡は、北東方向へ約四〇m進んだ後、南東方向へ約二〇m屈折し、その後東へ延び調査区外へ抜ける。この屈折は自然の蛇行によるものであると考えられる。川幅は上端で三～五m、下端で二～三m、深さ八〇cm前後を測る。検出状況から当時この範囲内で幾度も流れが変わったことが窺える。遺物は、上層～最下層の各層から出土した。特に屈折部から以西では、川底に貼りついた状態のものが多く、木簡もこの状態で出土した。

主な共伴の遺物は、須恵器、土師器、人形、斎串、下駄、加工木製品などである。須恵器が圧倒的に多く、かつ大半は杯類で占められる。この中には「介」「丈部」「蓑万呂」「蓑」「成」「大」「法」「秋」「中」「木」などと記された墨書土器や、「廣」「x」などのヘラ書きの土器がある。また杯蓋のいくつかは硯に転用されている。多量の土器にまじって木製品も多く、中でも県内で初めて出土した人形は、八点を数える。

遺物は、奈良時代後半～平安時代初頭までのものに限られることから、この時期に集中して捨てられたことが窺われる。また遺物の状況から、川に水はあったものの流れはそれほど早くなく、よどみの状態であったと考えられる。したがって遺物の大半は廃棄当時の

状態であるとみている。

川の北側には、直径九〇cm、深さ一・七mを測る円筒形の素掘り井戸を確認した。この中からは須恵器、曲物の底板、刀子が出土した。刀子はほぼ完全なもので刃と柄の接合部は、撚り糸によって巻き絞めたものである。また「甲」と記された墨書土器も出土した。

8 木簡の積文・内容

- (1) ・×本利并七十五束又

□□□□十五又□□□□

(130)×18×6 081

表面には十一文字が記されている。「貸し付けた稲とその利息分を合わせると七十五束。また同じく本利……」という内容の出挙に関わる木簡である。

共伴した遺物は、奈良時代後半から平安時代初頭までの時期に比定できる。とすれば五割の利子でなければならない。貸し付けた稲とその利息分を合わせると七十五束というのだから、貸し付けた稲は五〇束で、その利息分は二五束、その合計が七五束となり、計算上も合ってくる。

束は略体字を用いている。平安時代に入るとよく用いられるが、奈良時代後半に、すでに束の略体字が用いられたことが窺える。

裏面には八文字が記されているが、解読できない文字が多い。束は偏が付く文字とも考えられる。

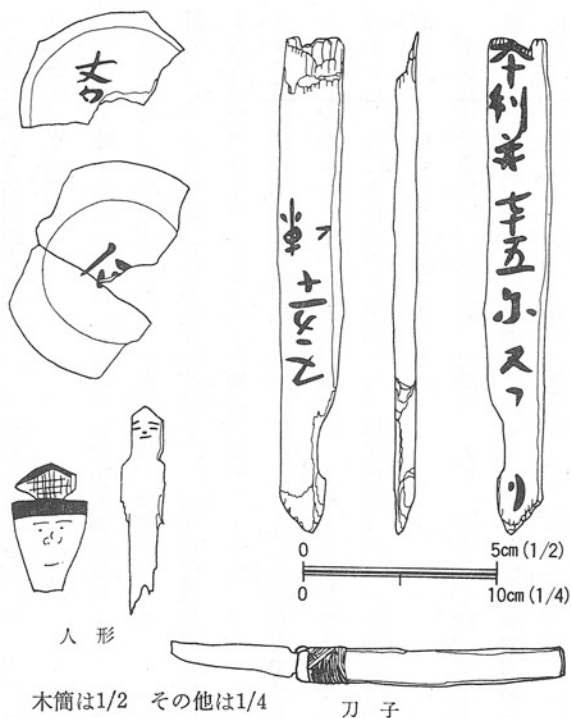
なお釈読は、京都大学の鎌田元一、富山大学の本郷真紹の両氏による。釈読には、赤外線テレビカメラを利用した。

木簡は富山県埋蔵文化財センターで保管している。

9 関係文献

大島町教育委員会『北高木遺跡A・B地区発掘調査報告』(一九九三年)

(安念幹倫)



木簡は1/2 その他は1/4

刀子